

北海・オブ・ザ・デット

山本〇太郎

基地のある北海道、釧路の市内から海岸線に沿って伸びる国道三十八号。晴れていれば海岸側にはどこまでも水平線の見える太平洋。右側には枯れた葦の生い茂った広大な原野。どこまでもまっすぐに伸びている道路。吹雪で何も見えないが、今も昔もこの辺は何もない。総重量約八トン、排気量五千二百二十㏄、パワーゲート付日野レンジャーは軽快に三十キロの速度で走行中。丁寧な手を入れた甲斐があつて、エンジンも快調だ。湾岸ラジオは鈴木サントニの懐メロが流れてるからまだ午後六時前。朝からの吹雪がなかなか止まず待っていて仕方がないので日が沈む前に出てきた。

パンデミックからこつち、天気予報は無くなった。衛星は飛んでも受信する組織はないし気象予報士もお天気お姉さんもない。いつになったら雪がやむのか知れたかったら年寄りの方がサイコロよりは頼りになる。

鹿の群れや動物の死骸で塞がれることもあるこの道も、冬の間は凍りつき路面を雪が吹き抜けていく。道も悪いし視界も悪い。今日は欲張らずこれだけ届けて、西港のフェリー基地に帰ろう。欲張って事故の方が馬鹿馬鹿しい。届けものは配給食料、届け先は白糠の公民館まで。夏の間なら国道三十八号線をひたすら西へ片道大体一時間の距離だ。でも今は路面がスケートリンクみたいに氷ついてるし、視界は吹雪で三十メートルがいいところ。速度はいつもの半分。事故っていいことなんて何もない。ただでさえ移民の我儘にイライラしている本部の人間に手間をかけると、後々まで何を言われるかわかったものではない。

「別にいいさ、三時間かかって五時間かかって」

配給センターもある西港のフェリー基地はギスギスして居心地が悪い。帰るのは遅ければ遅いほどいいくらいだ。本土からの避難者がいつも文句を言いにくるし、お偉いさんは大声で喚くだけ。イライラしたって何も解決しないのに。日本は東京、大阪はもちろん仙台から南はどこも感染者で溢れてるそうだ。九州や四国の確かな情報はない。感染者は映画のゾンビみたいに人を襲うらしい。本当だろうか。田舎者だと馬鹿にして適当な

ことを言ってるかもしれない。逆に嘘ならどんなにありがたいか。そんな嘘みたいな世界になってもう三年。幸い市内の設備で足りているし備蓄もあるから生活は変わらないけど、インフラは崩壊してる。テレビは札幌の放送局が定時報道をやってるだけ。ネットはあらゆるサービスが止まっているが、世界にはまだ人が活動してる都市がいくつかあって、インターネット上のコミュニティで情報交換をしているらしい。そう聞いた。メジャーリーグはやってないし、youtubeは人を襲う人の映像で溢れてる。このご時世のGであんなフェイク画像を作る暇人はいないから多分本当なんだろう。もともと釧路なんてあってもなくても誰もこまらな。そんな日本の端っこでひっそりと暮らしていたから実感はない。石油とガソリン、灯油やガスがあれば今までと同じ暮らしができる。もちろんないものはあるが、今はあるもので何とか回している。都市がそっくり無くなったから、芋も魚も買い手を失って蓄えに回ってるくらいだ。食う人が減ったんだから、しばらくは保つだろう。

白糠は釧路管内で人口も少なく老人ばかり。市内に移ってくれば無駄なガソリンを消費して食料を届けなくてもいいんだが、それはそれ。死ぬ前くらいは好きにさせてやりたい。

ラジオは湾岸ラジオという番組を東京から逃げてきた来た合田という老人が放送している。釧路の出身で昔東京のラジオ曲局で働いてたそう。テレビと違って小規模でも運営できるらしい。唯一の広報機能として貴重だし、音楽がないと心が荒む。娯楽はラジオに頼りきりだった。チューニングメータをいじっているとライトが人影を照らした気がして慌ててハンドルを切る。思わず急ブレーキをかけるが、ハンドルがロック。後輪が空回りしてケツをふってしまう。そのまま路面を滑り路肩の雪山に突っ込んで止まった。

「危なかった」

深く息を吐いて落ち着くのを待つ。ミラー越しに様子はわからない。ゆっくり切り返してさっきの人影を探す。こんな時間にいったい誰だ。ヘッドライトも見えてただろうに路上に出るなんて。何もない道で良かった。接触音もしなかったからぶつかってはいるだろう。ゆっくりと戻ると人影が見えた。じっと突っ立ったまま動かない。ウィンドウを下げると冷たい空気が入ってくる。慌ててジャンパーに袖を通して叫んだ。

「あんた、大丈夫かい」

返事がない。よく見れば頭にも肩にも雪が積もっている様子が変わる。気でも失ってるんだろうか。立ったままで？　しょうがない。車を降りて駆け寄った。

「どうしたのさ、そんなところにいたら危ないべさ、送ってくから車に乗んなさい」

雪が何重にも氷ついてよく見えないが、男は手を前に突き出したまま立っている。コートも着ずにスーツだけで何時間も吹雪の中を歩いたようだ。服が凍りつき足元には雪が吹き溜まっている。いったい何時間ここにいたんだろう。顔を覗き込むが雪に覆われて表情は見えない。肩を揺すっても反応はない。何が起こったのかわからないけど、どう考えても死んでいる。マネキンだったらいいのに。笑い話で済む。ひよっとしたら。面倒なことになった。

「いやいやいや、どうしたもんだか」

レンジャーに戻って無線で基地を呼び出した。

に四人のコートを着込んだ男たち。遅れて医者がかかる。本土でゾンビを知っている男。こいつはそうだな。ガチガチに凍っている。「こいつはあれだ。ゾンビだ」「へー、これが。いや、話には聞いてたけど見るのは初めてだわ」「体温もないし生きてない。」どっから来たんだ。

湾岸ラジオは滝川二ナのダンスミュージック。もうこんな時間か、今日中に配達は無理そうだ。公民館の人間ももう寝てるだろう。車に乗って保安部の須賀さんを待つあいだ、ヘッドライトに照らされた男を眺めていた。何時間も前からこの状態だったようだ。無線の感度は悪かったがちゃんと伝わっただろうか。誰かが窓を叩く音で目が覚めた。いつの間にか寝ていたようだ。外は暗くてよく見えないが、須賀さんのハイゼットと医療班のものらしきステーションワゴン。車から出たくないが仕方がない。

「わざわざすみません。自分じゃ判断できなかったもんで。それが誰かわかりましたか」と須賀さんに聞いてみる。

「いやー、今の状態じゃ難しんじゃないかい。行方不明の届出は基地に行かないとわかんないから今はなんとも言えないね。秋山さんに見てもらってるけどね。私らもここじゃどうもこうもないわ」と言われた。ひとまず医者らしき秋山さんの作業を見守っている。明山さんは車に行ったり戻ったりした後我々を手招きをした。

「ちょっとここ持ってもらってでもいいかい」と言って凍りついた男の右手を持ち上げる。

「秋山さんその前に、この人誰か分かったかい」と須賀さんが聞いた。

「ああ、これはアレだね」と秋山さん。須賀さんと顔を見合わせる。アレってアレだろうか。須賀さんもそう思ってるに違いない。

「アレってアレかい？」

「ああ、これはアレだね」

「なんでわかるのさ」

「それはこれさ、ここみてもらってもいいかい」と言って秋山さんはスーツの男の指をとった。ライターで炙ったのか、右手の指は五本とも氷が溶けて素肌が見えている。そしてそば指がピクピと動いている。

「うわ」須賀さんと俺は同時に大きな声を出して後ずさった。

「生きてるじゃないですか、救急車を呼ばないと」と須賀さんが言った。俺もそう思った。慌ててレンジャーに戻り無線をとり救急チャンネルを回し場所を伝えた。助手席の毛布を持って負傷者まで戻ると須賀さんと秋山さんは何やら話し込んでいる。

「須賀さん怪我人だ。手当すればまだ間に合うかも」と声をかけても返事はない。

「丈二君、やぱりこの人手遅れだとさ」

「でも、さっき生きてましたよ」

「動いたけど、生きてない。アレなんだとさ」

「アレってアレかい？」

「どうやらゾンビみたいだね」

本当だろうか。感染者患者が海を渡ってきたというニュースはまだ聞いていない。だけど北海道の海岸線全てを監視するのは不可能だ。世界の情勢を聞く限り、一週間の間に連絡の途絶えるコミュニティはいくつかある。日々いくつかの生きている人のコミュニティはゾンビに襲われてなくなってるっておとだ。他に百人単位のコミュニティが突然なくなる理由なんてない。

「だとしたら大した大事なんじゃないかい」と須賀さんに対応をせまる。

「いや、丈二の言う通りだわ、本部に連絡するから、あんたは秋山さんを手伝ってくれるかい」

「わかった」と答え秋山さんの指示を仰いだ。衛生班の車にある防護服を着て工具箱を運ぶ。「よし」と言って次にやることを教えてくれた。指を切り取りサンプルとして持ち帰る。他はこの場で解体。氷が溶けると動き出すから明日の朝までには首を胴体から切り離すように。そう言って溶かした右手の指四本をボルトカッターで切り離しタッパに入れ車で帰ってしまった。気がつけば須賀さんもない。そういえば基地で揉め事が発生したから戻ると言っていたような。

改めて感染者をしてみる。映像では何度も見たけど直に見るのは初めてだ。何日外にいたのかわからないが、芯まで凍っているように見える。本当にこれがゾンビだろうか。秋山さんが騙すとは思えないけど、間違うことはあるかもしれない。これを解体し終わって間違いに気づいたら、俺が人殺しになるのだろうか。二人がびびって裏口を合わせられたらおしまいだ。念の為、左の指も解凍してみよう。だがどうやって。今は配達の途中だ。ゾンビを解体する道具なんかない。くそ、秋山さんに借りればよかった。凍りついた遺体をバラすには何が必要だ？ 車の工具箱なら何かしらあるだろうか。

ドライバやスパナは使えない、ペンチはまだ使えそうだがこんなにガッチリ凍ってるものはどうにもならない。他に何か。ジャッキで挟むのはどうだろう。金槌で折るのが早いかな。

「くそ、こんなこと、なんであんたこんなところにいるんだ馬鹿野郎。あんたさえいなけりゃ、配達もとくに済まして飯を食べてるのに」
手が冷たくて金槌でうまく狙いが定まらない。何度も打ちつけるうち小指が折れた。

「やった、小指が折れた。これを溶かしてみれば……」

でもどうやって。体温で溶かすのは嫌だ。ライターがあればいいけど、タバコをやめてからは持ち歩いてない。そうだ車のシガーライター。車内には段ボールもあった。なんとか火をつけ指を炙るとピクピクと動き出した。

「うわ」

思わず放り出す。正直、気持ち悪い。しばらくみてるのと動かなくなった。凍ったんだろうか。どうなんだろう。これがゾンビか。こんなものどうしろと。もう、二十四時を回っている。時間が経てば経つほど体が冷える。このままじゃ俺が氷りついて死体が二つになってしまう。

「しょうがない。やるか」

秋山さんの言うとおりでこれがゾンビだったら大変なことになる。手伝いが来るまでできることをやっておよう。首を切り離すために遺体を倒して寝かせる。これはどうみても人間だ。人の首を切り離さなきゃ家畜なんじゃない。いざとなったらなかなか踏ん切りがつかない。体はどんどん冷えてくる。

「なんでこんな目に」

いつの間にか面倒なことになってしまった。逃げ出したいが仕方ない。首はジャッキで挟むにはが太すぎる。ドライバーを突き立て氷を削るか。三十分たって何ミリも削れた感じはしない。首は完全に芯まで凍りついていた。試しにマイナスドライバーを金槌で叩いてノミみたいに突き立てると、一打ちただけでドライバーが折れてしまった。くそ、ダメか。やばい、指がかじかんで動かなくなっていた。ノコギリかチェーンソーが必要だ。慌ててもう一度無線で助けを求めた。相変わらず感覚が悪くちゃんと伝わっているか確信はない。それまでに何ができる。火で炙って氷を溶かすか。指を溶かしたのと同じ要領で首を炙るがダンボールくらいじゃどうにもならない。もっと時間をかけて燃えるものが必要だ。

吹雪で見えないが枯れ草と木の枝くらいはいくらでもあるはずだ。それを燃やせばダンボールよりマシだろう。手探りで枯れ草や枝の山を作るのに何時間もかかった。集まった枯れ草も枯れ枝も乾燥してるが凍っている。ダンボールじゃ心もとない。

「あ、配送品」

荷台の配給品にサラダ油があったはずだ。レンジャーは冷凍車だが荷物は凍ってない。断熱効果の高い冷凍車だから品物を凍らせずに運ぶことができる。案の定すぐ使える油があった。風が強いので、雪を集めて小さい風よけを作り、中にサラダ油をかけた枯れ草を入れて火をつける。

「やった、燃えた」

少しずつ集めた草や枝を焚べて火を強くする。そこに遺体を引きずって、首の部分が温まるようにセットした。

うまくいったようだ。表面の雪が徐々に溶けている。折れたドライバーで押してみると皮膚はまだかたい。中はまだ凍りついているようだ。待っている間にもう一度無線で基地を呼び出したが、応答はなかった。誰か道具を持ってきてくれるんだろうか。だんだん東の空が明るくなってきた。ただ見ているだけだと寒くて眠くなってくる。

「溶けるまで車で待つか」

ドアを開ける。と「ぐううう」と人の声がした。気のせいかな。風が吹き抜けて妙な音がなっているだけだろうか。

「脅かすな」とトラックを叩くと「ううう」と声がした。誰だ。見回しても誰もいない。いたとしても吹雪で見通しが悪い。トラックの影、無線、ラジオを調べてみたがおかしな音はしていない。物音は外から聞こえた。ちくしょう。車から降りて確認しなくちゃ。一步外に出ると寒さで背筋が伸びる。吹雪が当たって頬が痛い。耳を澄ますと風に紛れてガサガサと音がした気がした。もう帰りたい。どうしてこんな目に。寒さでかじかんだ手首を揉みながら遺体をみると火が消えかけ、風除けに作った雪の山が崩れている。直そうと近づくとソレがうううと呻き声を上げた。

空が明るくなってきた。今の時期は昼でも氷が溶けるほど気温は上がらない。とはいえ、これは現実だろうか。さっきまでカチカチに凍りついていた人間が動いて呻き声を上げている。どうなっているのか、わけがわからない。頭の悪いおれが考えてどうなるってんだ。

「くっそー、誰かー、誰か来てくれー」

アレを火から降ろして頭を足で押さえて、首をドライバーで突く。凍った首はだいぶ溶けているようだ。表面が少し柔らかくなっている。呻き声は気になるが腰をかがめて無心に首を突く。突かれると痛みがあるのか知らないが、アレが呻き声をあげる。首は肉のシェーベットみたいになっている。それでも皮膚の下はまだ硬い。

「くっそー、削れる気がしねー」

これじゃいつまで経っても終わらない。他に使えるものを探す。工具箱をひっくり返しても使えそうなものはない。何か、何かないか。荷物は食品ばかり、荷台には雪用のタイヤチェーンと雪かきスコップ、滑り止め用焼き砂、毛布に台車。折り畳みの小さなノコギリくらい工具箱に入れておいてもいいかもしれない。

「くっそ、寒みい」

動きを止めると汗が冷える。指先の感覚はもうない。なんかないか、なんか。アレはこっちを向いてうめいている。こっちを向いて？　おい、首が回ってるじゃないか。どういうことだ。みると頭を覆っていた雪はすっかり溶けている。顔は水分が抜けたのかシワシワだ。目をしっかり見開いてこっちをみている。どうなってんだ。明るくはなってきたけど吹雪は止んでないし、路上の氷も溶けてない。だから気温は上がってない。車の下の路面は溶けているがそれはエンジンの熱だ。

「あー」

風除けのために、車の近くにアレを寄せていたからエンジンの熱で溶けたのか。足を持ってエンジンから引き離す。呻き声は止まらない。

「どうする」雪に埋めようか。もう一回凍らせればいいじゃないか。それで助けを待とう。鋸があればすぐに終わる。荷台からスコップを取り出し、道端の雪をあれにかけた。

待てよ。手元のスコップは雪かき用で四角い平スコップだが先は鋭い。そしてコレはどうみても人間じゃない。頭を踏みつけ、首にスコップを突き立てるとスコップが首に少し埋まった。やった、いけそうだ。無心にスコップを振り下ろす。少しづつ首の肉が削れていく。いけるいける。何度もスコップを振り落とす。こんな重労働はいつ以来だろう。腰は痛いし腕がだんだん上がらなくなってきた。これはきつい、ついにスコップを振り上げたときふらついた。なんだ。足も限界か。バランスを崩して尻餅をついてしまった。が、起き上がろうとすると、足が突っ張る。みるとあいつが呻き声を上げながら俺のブーツに噛みついていて。丈夫なブーツだから気が付かなかった。動画で見たけど、噛まれると感染するんじゃないか。慌てて足を抜き確かめる。靴はなんともない。防護服も破れているところはなかった。なんだってこんなことをしなきゃいけないんだ。手頃な石を持ってきてあいつの口にぎゅうぎゅうになるまで押し入れ靴で踏んでさらに押し固めた。呻き声は漏れるが、もう口を閉じることはいできない。

危なかった。汗をかいているが、寒気がする。足先と指の感覚はない。もうへとへとだ。スコップを振り上げる力もない。コイツをどうしたもんだろう。その時、吹雪地は違う音が聞こえた。明かりもちらりと見えた気がした。

きてくれたのは、須賀さんだった。とにかく俺のレンジャーに避難する。体は芯まで冷えてしまった。須賀さんが慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫だったかい。いやいやいやいや、すまんね。港の方で怪我人が出たからって呼ばれたのさ。滑って転んだだけだって言っても年寄りだから骨までやっちゃって大騒ぎさ。病院行って医者起こして見てもらって帰ってきたら秋山さんいるから、ジョージ君どうしたのさって聞いたら、知らねえってさ。どうしたかと思ったら、無線のメモがあったから飛んできたんだ。いやもう、帰るところで見つかってよかったわ」と事情を話してくれたが、どうでもよかった。他にも数人が車から降りてきた。避難民の中からゾンビを処理したことがある人を連れてきてくれたそう。テキパキと作業をこなしている。あたりに石灰をまき、二人で頭と足を押さえて一人がゆっくりとノコギリを引いて首を切り離す。そのまま両足も根本から切り離しバラバラにして袋に詰めた。

「あんなの持って帰って、どうすんのさ」と聞いた。

「そんなこと言っても、何があるかわかんないんだとさ。このまんまにしておくわけにはいかないっしょ。キツネとか食べたらどうなるかもわかんないしね」と魔法瓶から熱いお茶を注いで勧めてくれた。これはありがたい。指からじんわりと熱が広がる。静かに啜って飲み込むと熱い塊が喉から胃へ落ちていく。何が原因か、どうやったら感染するのか、三年も経っているのに何もわかっていない。

「海は渡れないって聞いたけど、なんでこんなとこにいるのさ？」と須賀さんに聞いてみた。一応基地の人間だから、情報は俺よりも持つてるだろう。

「いやー、聞いてないんだわ。テレビでもなんも言ってなかったし、そもそもわかる人がいるのかどうか」とぼやいている。誤魔化してる感じもしない。とにかく、死体が片付いてよかった。今後はあんまり白糠の配達は受けないようにしよう。

助けに来てくれた人が、車にアレの入った袋を積み込む頃には日は高くなり吹雪が弱くなっていた。配達は須賀さんが別な人を呼んでくれた。このまま車運転しても事故を起こしかねない。すこし休もう。シートを倒して眠るに間に間に、須賀さんが窓を叩き叫んでいる。無視しようかと思っただ、ドアの取手をガチャガチャと引くので仕方がない。起き上がると晴れ上がった海岸線。国道三十八号はどこまでもまっすぐ続き、横には

砂浜と水平線が連なっている。その広く見渡せる景色にポツンポツンと人が立っている。両手を前にあげ、身動きもせず。それが見渡す限り何体も何十体も。道路の向こうまで、海岸にも、草原にも。